筆山

第8号/1989・8

祝・甲子園出場号

土佐中・高同窓会 関東支部会報
〒112 東京都文京区水道1-10-7 同学社気付 ☎03-816-7011 編集人/小松勢津子(35回)

'89前半支部活動報告

▽1月21日=新年総会(東條会館)
▽1月28日=関西支部総会に宮地支部長、浅井幹事長が出席。
▽2月4日=広島支部総会に支部長、幹事長出席。
▽2月17日=常任幹事会(青山ダイヤモンドホール)
▽3月16日=母校活性化委員会関東支部の会(サンケイ会館)
▽5月20日=活性化委答申のため宮地支部長高知へ。
▽7月3日=常任幹事会(新宿「野村クラブ」)

●年会費二〇〇〇円納入状況

=平成元年度分の納入者数は五月末現在四九六名となりました。

ひき続き、未納の方のご協力をよろしくお願いします。振替東京7―142816

(土佐中・高同窓会 関東支部事務局)

支部名簿作成に協力をお願いします

関東支部の名簿は一九八三年に作成以来、すでに五年を経過しました。この間に異動も多く、また会員数も増えて二五〇〇人に達していると見込まれています。

新名簿の作成が各方面から要望されており、ことしの年末までに刊行の予定で準備を始めます。名簿の充実は同窓会活動の基幹であります。住所その他異動のあった場合はぜひ事務局までご連絡下さるようお願いします。

また同期の方などの情報をお寄せ下さい。

本部でも70周年記念名簿つくる

来年、母校が創立七十周年を迎える記念事業の一つとして、同窓会本部では名簿を発行する予定で、調査・広告などの協力を――と呼びかけている。

8月12日(土)に 高知総会

同窓会本部の総会は八月十二日(土)午後三時から、高知・新阪急ホテルで開催されます。お盆で帰高中の方、ぜひご出席下さい。

◎来年の関東支部新年総会は一月二十七日(土)午後三時より、今年と同じ東條会館で開催、講師は34回生の合田佐和子さんの予定です。

▼同期会をしました▲

30回=5月27日、新宿・野村ビルの「野村クラブ」で。吉田冨士子先生をお招きし、高知からの参加者3名を含め、45名が参加しました。

33回=6月3日、「竹橋会館」で。参加者は早朝のゴルフ組を含め49名。深夜(早暁?)にいたる三次会まで、大いに盛り上がりました。

おくやみ申し上げます

元教頭で物理を担当された**久保田伸雄先生**は六月三日ご逝去されました。六十九歳。先生は昭和二十一年から五十八年まで三十七年間にわたって土佐中・高で教べんをとられました。

◇◇◇

松尾三郎先生は五月三十日、心筋こうそくのためご逝去されました。八十七歳。先生は昭和十一年まで国語を担当され、後に国学院大学理事長をつとめられました。

出版レーダー

▽**大原健士郎氏**(24回)『おれたちは家族』朝日新聞社 四六判上製 二一二頁 定価一一〇〇円(税抜き)

▽**倉橋由美子氏**(29回)『交歓』 新潮社・定価=一三〇〇円(税込)

▽**塩田 潮氏**(40回)『巨悪人脈』 悠飛社・四六判三三六頁 定価=一五四五円(税込)

■編集後記

◇活性化委の答申が理事会に提出された。父兄を中心とした振興会や、理事、教職員、父兄、同窓会各代表で構成する評議員会でも厳しい意見が続出と聞く。世の中の変化についていけない老舗の趣きなきにしもあらず。藤田巨人のようにはいかんだろうか。 (A)

◇十四年ぶりの夏の甲子園出場を決めた野球部に同窓のフィーバーが続いた。自重に自重を重ねていたA氏も対中村戦には、ついに朝一番の飛行機で応援にかけつけた。決勝にも勿論。カネと夏休みが消える。41回のT氏は高知に電話、受話機にラジオをくっつけて実況をきいた。北海道への家族旅行も甲子園のため中止か? 18回のT氏、23回のO氏など早々と「寄附はどうなっちゅう」と奔走。久々の熱い夏です。 (I)

おらんくの新年総会はミュージカルとともに

'89年土佐中・高同窓会関東支部新年総会

'89 土佐中・高関東支部新年総会が1月21日(土)、半蔵門の東條会館で開かれた。約二百人のOB・OGが集まり、大盛況だった。前半は、総会のあと、演出家・竹邑類氏（35回）の講演と華やかなミニ・ミュージカル・ショウで多いに盛りあがった。

そして後半は、恒例の大懇親会。先輩・同輩・後輩入りまじり、お酒も升々はいって、ガイにしゃべくりまくった、いつもの土佐中・高の夕べだった。

▲振付の即興的実演をする竹邑類氏(前)と、ザ・スーパー・カムパニイのメンバー。

▲ウン年前の卒業式を思い出しました。

▲向陽の空　浅緑　広きぞ　己が額な〜り…。

▲「ネエ、ネエ、あのミュージカルよかったわね」

▲土佐高もマドンナ作戦？

▲「くじ運がいいんだ、ぼく」

関西支部の会報名「なんぷう」に

関西支部の会報の第2号が発行され、名前が「なんぷう」と決まった。

同支部では昨年の十一月に待望の創刊号を発行、毎年五月と十一月の二回発行をめざし、スタッフ一同やわらかい紙面づくりで愛される会報にと頑張っている。

第2号では半年かけて自転車で各地をまわった60回生の山崎英司君の〝自転車一人旅〟の手記など若い人の記事も多く楽しめる。「同窓生訪問」は34回生の画家、田島征彦氏。

なお同支部は勇退された北村旦氏（18回）の後任支部長に28回の岡村毅郎氏、幹事長に楠瀬強氏（35回）が就任した。

広島支部設立総会開く

同窓会広島支部の設立総会が二月四日に開かれ、市内在住のOBら三十六名が出席した。関東支部からは宮地支部長と浅井幹事長が出席し、設立を祝った。

総会では広島高検を四月に退官した竹村照雄検事長（20回生）が三十年の検察官生活の体験をまじえて、土佐人の生き方など随想風に約一時間の講演。

規約、役員の決定のあと懇親会に移り、和気あいあいの雰囲気の中で旧交を暖めあった。

同支部は会員約百二十名。支部長＝岡村進介氏（30回）事務局長＝小島一洋氏(31回)。事務局は四銀広島・大竹支店。

転勤や単身赴任による異動の多い地区だけに、会員の出入りも激しく、支部の運営は苦労が予想されるが、スタッフ一同「心と心のネットワーク作り」を合言葉に張り切っている。

「根っこ」

土佐中一A学級通信

昨年度一年間にわたって一年Aホームの担任として、西森茂夫先生が出し続けた学級通信「根っこ」が四月に一冊にまとめられた。

A4判横長の九十八頁。前の二〇頁は写真集。昨年の四月十四日の1号からことし三月二十五日の63号までを収録。中学入学直後の生徒たちの成長の過程が「合格発表の日」「クラスマッチ」「遠足」などの感想を通して綴られている。

また、西森先生が二週間の中国訪問で体験した日中戦争のツメ跡、侵略戦争のレポートも十四回にわたって連載されている。希望者に実費二千円で配布。直接西森先生へ。

「学級通信を通して、生徒たちと父母の方々と心の響きあうつながりができたことが一番うれしいことです」と西森先生は「あとがき」で書いている。

＊

●**向井隆豊展**　44回生の向井氏の個展が七月五日から十五日まで、大阪市の日本文化会館で開かれた。

32回生、意気強し

京の都に87名大集合!!

32回生の32周年同窓会を、関西で開催しようと決め、早々と、会場は京都〝都ホテル〟に決定。登録者87名という大勢が、全国から三月四日に集まりました。中沢節子先生もご出席になられ、修学旅行よろしく我々と共に、一夜を飲み、語り明かしたわけです。

〝ようたんぼう〟が大声を上げて静かな古都を、揺がすのではないかとの下馬評が高かったのですが、まあ、レサインで通可。それでも飲む程に、酔う程に、例の如く少々（升々）トーンが上がり自分の部屋を捜しての深夜徘徊族がいたとかいなかったとか——。

当日はあいにくの大雨となり、高知からの出席者は朝早くから空港に詰め、何がなんでも入洛するとの気持が通じたのか、やっと機上の人となれたわけです。35周年の同窓会は、関東で、開催することになり「もう早や言いゆうかよ」と、土佐っぽは相変わらずせっかちです。愉快で、愛すべき32回生です。

（32回／山下成子＝大阪）

野球部が14年ぶりに

夏の甲子園出場決める

第71回全国高校野球選手権大会高知県予選決勝戦は、七月二十七日に行われ、母校野球部は高知南を3対1で破り、見事ひさしぶりの甲子園出場を決めた。夏の甲子園は、玉川選手（52回）がサイクル・ヒットを記録した昭和五十年以来実に十四年ぶりで、通算四回目の出場。春、夏合わせて九回目の甲子園である。

ノーシードで行われた組合せ抽選で、高知商、明徳、高知の強豪ひしめくゾーンに入ったが、籠尾監督の〝土佐高野球〟復活にかける執念の下に二年生主体の若いチームが一戦毎に力をつけ、見事な集中力で、五戦中四戦に逆転勝ち、甲子園キップを手にした。

☆一回戦

須崎	0	0	1	0	0	0	0	4	1	6
土佐	0	0	0	3	0	0	0	5	×	8

☆二回戦

明徳	0	0	1	0	0	1	0	1	0	1	0	1	5
土佐	1	0	1	1	0	0	0	0	0	1	0	3×	7×

延長十回一点リードされたが、三番森の三塁打ですぐ追いつく。延長十二回再度一点リードされ、その裏先頭打者が倒れ、もはやこれまでかと思われたが、四球とヒットで一死一、二塁とし四番黒川が2−1から、左翼芝生席に逆転サヨナラホームランを打ち、奇跡的な勝利をおさめた。

一六五センチ、61キロの小柄な体で16安打を打たれながら、二〇一球を投げぬいた小さなエース川村純の気力の投球に、ナインが燃えて応え、伝統の粘りと集中力がいかんなく発揮された会心の勝利であった。

☆準々決勝

清水	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
土佐	1	0	2	0	0	1	0	0	×	4×

☆準決勝

土佐	0	0	0	1	6	1	0	0	0	8
中村	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1

準決勝では強豪高知商にサヨナラ勝ちした中村と対戦。二回までに五安打され、一点リードされたが追加点を許さず耐えしのぎ、五回に送りバントをはさんで七連続長短打で逆転し、試合を決めた。

☆決勝

土佐	000	000	021	3
高知南	000	001	000	1

部長　楠目　博之
監督　篭尾　良雄

投手	川村	純二②	165	61	介良	右右
捕手	仙頭	昌史②	170	65	土佐	〃
一塁	黒川	明③	178	74	付属	〃
二塁	三木	一宏③	171	63	土佐	〃
三塁	山根	一洋②	178	72	太子東	〃
遊撃	西沢	年雄②	163	51	城北	〃
左翼	岡崎	守隆②	173	91	〃	〃
中堅◎	森	健二③	171	67	土佐	左左
右翼	池	正澄②	165	62	清水	〃
選手	本久	貴啓③	172	67	土佐	右右
〃	河村	裕泰②	170	64	〃	〃
〃	岩崎	匡宏②	165	59	〃	右左
〃	森尾	昌純②	163	60	〃	右右
〃	川村	裕範②	169	69	日高	〃
〃	野口	智広②	167	64	土佐	〃
〃	玉真	誠②	168	58	〃	〃
〃	岡田	徹也①	172	63	〃	〃
〃	久保	正①	171	60	〃	〃
〃	長滝	福二①	171	56	付属	〃
〃	青木	一英①	173	56	上分	〃

籠尾良雄監督の話

関東支部総会で「野球部の復活を願って」ご激励いただいてから五年目の平成元年の夏、やっと甲子園出場の悲願を達成できました。ご恩情にお報いすることができ感激です。甲子園では栄ある郷土の代表として、土佐高野球の健在ぶりをいかんなく発揮し、善戦健闘することをお誓い申し上げます。

甲子園出場の軌跡

年度	大会名
27年春	(第24回選抜大会) 1回戦　0−5八尾
28年春	(第25回選抜大会) 1回戦　6−0早実 2回戦　0−3銚子商
28年夏	(第35回選手権大会) 2回戦　15−3泉丘 準々決　3−0浪華商 準決勝　6−0中京商 決勝　2−3松山商
39年春	(第36回選抜大会) 2回戦　7−3浜松商 準々決　4−3平安 準決勝　0−1徳島海南
41年春	(第38回選抜大会) 1回戦　4−0高野山 2回戦　10−2室蘭工 準々決　1−0平安 準決勝　7−1育英 決勝勝　0−1中京商
42年夏	(第49回選手権大会) 1回戦　6−3浜松商 2回戦　2−0武相 準々決　1−2中京商
50年夏	(第57回選手権大会) 2回戦　8−1桂 3回戦　3−4上尾
51年春	(第48回選抜大会) 1回戦　4−3豊見城 2回戦　6−0徳島商 準々決　3−4小山

セントポーリア談義

曽和純一（16回）

小さな妖精ともいわれるかわいい可憐な花。そっと窓辺や食卓に飾ってみたいと思ったことはありませんか。セントポーリアはそんな花です。

アフリカのタンザニアの山岳地帯で一八九二年初めて発見され、ドイツ人セントポール男爵に因んで名付けられたこの花は、米国ではアフリカンバイオレットの名前で改良が進められてきた。日本でもビール会社がバイオテクノロジーを使ったりして益々品種も豊富になってきている。

この花との本格的なつき合いは、毎日が日曜日になってからのこと。地面のないマンション暮らしでも小さなスペースで栽培できる。盆栽ほど年季がいらず、栽培の歴史も新しく、発展性がありそうだ——という点が決め手になった。

そんな訳で、同好会の教室に通って基礎知識と技術の修得をすることにしたものの、同好会のオバタリアン・パワーの中で、オジンは肩身の狭い思いを免れなかった。

それでも一応花を咲かせ、株を殖やすテクニックを体得し、コンテストで賞をとるまでには至らないものの「わかれば簡単セントポーリア」というキャッチフレーズに共感しているこの頃である。

ところでこの花づくりには、植え替えや手入れに精神集中を要し、指先をよく使う。オバタリアン・パワーにもまれるため緊張感を伴う、など老化防止の効用あり、老後生活を支える柱の一つに役立っている。

Y & Y

龍馬の精神に酔う

竹邑類演出のミュージカルをみて

去る七夕の七月七日、この日は竹邑類さん（35回）演出のミュージカル「坂本龍馬」をみんなで観にいく日です。私達は数ある(?・)デートの誘いをことわり、週末の業務に忙しい同僚達には「ちょっと龍馬に会ってくる」と謎の言葉を残して、神宮外苑の日本青年館大ホールへと向かいました。

ロビーで会った同窓のおじさま達は、少しきどっていていつものお酒の席と違う雰囲気に、一種の緊張感を覚えました。

そして同窓有志（28回の「やまもも会」を中心に）から類さんに贈った花のそばを通って二階へ。入口のドアを開けると最前列に陣取ったシルバーグレーの横一線。若者の多い会場の中でひときわ目立って、何やら不思議な気持で席に着きましたが、類さんを応援する諸先輩の姿は、たのもしくもありました。

やがて幕があがり二幕二十六場面のミュージカルの始まりです。西城秀樹扮する龍馬が、京都を舞台に薩長連合を促進、大政奉還へ導びこうとするが、刺客の手にかかって死ぬまでの過程を、龍馬の愛人おりょうとその母お富勢（雪村いづみ）の心情を織り込んで、歌と踊りで演出。

私達はこれまでミュージカルには無縁でしたが龍馬という題材にひかれて観ました。なんと土佐のウルメが登場するのです。龍馬が中岡慎太郎とお酒を呑む場面です。

「土佐のウルメじゃあ」

と大喜こびする龍馬の姿に私達はウルメ大好きの土佐人をみて、類さんならではの演出だと思いました。

西城の龍馬は、本物の龍馬よりも外見、土佐弁ともにスマートで洗練されていました。武田鉄矢のイメージが強かっただけに、この新しいタイプの龍馬によって高知県民のイメージアップになったのではないかと、ひそかにほくそえんだものでした。

ただ、土佐弁に誇りを感じている私達頑固者には、スマートな土佐弁は少々もの足りない気持がしました。

歌の中で「誰もが龍馬になれる」という言葉がありました。若さのすばらしさ、目的に向かって進むエネルギー。忘れかけていた龍馬の精神に私達は酔いました。

きっとここに座っている先輩方もそんな思いではなかったか、各々の胸にどのような思いを抱いて龍馬をみていたのかと、ふっと思いました。

そしてこの東京で故郷土佐のことをいっしょに想いかえすことのできる同窓会は、やっぱりステキだと思い、ますます愛着を覚えたものでした。

大原由紀・金沢由里＝55回

母校再生へ一丸

活性化委が打開策を答申

学業・スポーツ両面で低迷を続けている母校を何とかしなくては――。同窓会本部では二月に「母校活性化委員会」（2回生・西本良雄委員長・11名）を編成、現状把握と対策について、検討協議を重ねてきたが、その結果がとりまとめられて去る五月二十日、中島暁同窓会会長に答申された。

答申によると、「母校の現況は低迷の一語につき、放置すれば凋落は目に見えている」と判断、「遅きに失したとはいえ、関係者一丸となって期待される土佐再生への道をさぐることが急務である」とし、Ⅰ「学校教育の中で」Ⅱ「優秀生徒獲得のために」Ⅲ「進学成績向上のために」の三つを柱に打開策を提言している。

答申書は、中島会長から七月六日に開かれた理事会に提出された。今後答申がどのような形で生かされるのか、注目されるところである。

母校活性化委員は次の通り。

委員長　西本　良雄（2回）
副委員長　佐々木義明（28回）
委　員　富田　信正（8回）
町田　守正（16回）
高崎　元尚（16回）
山本　雅昭（23回）
浜松　英彦（26回）
土居　幹長（31回）
福留　脩文（37回）
宮内　巌（39回）
岡内　啓明（42回）

〔答申策定経過〕

第1回（2月6日）
委員委嘱・今後の方針
資料配布

第2回（2月23日）
現状把握・今後の日程
及び議題の決定

第3回（3月11日）
入試制度・入学定員・優秀生徒獲得について

第4回（3月24日）
教育課程・補助、実力テスト・特待生制度

第5回（4月1日）
63回生との懇談

第6回（4月7日）
振興会役員との懇談
教員の資質

第7回（4月22日）
協議のまとめ・緊急対策・その他

第8回（5月20日）
答申案検討　答申

関東支部でも討議熱っぽく

母校活性化のための関東支部の会が三月十六日、サンケイ会館会議室で開かれ十二名が出席した。会議は午後六時から三時間半におよび、母校の将来を憂慮する熱心な討論が続き、この結果は今回の答申に反映された。

会には高知から片岡博彦同窓会幹事長（30回）が出席、本部での活性化委の動きなどについて経過を説明。その後学校のあるべき姿など討議した。

出席者は次の通り。

本部　片岡　博彦（30回）
支部　武市　楯夫（18回）
宮地　貫一（21回）
岩谷　清水（27回）
中城　正堯（30回）
久保内端郎（33回）
小松勢津子（35回）
土居　正（44回）
矢野　真実（53回）
事務局
浅井　伴泰（30回）
窪田　秀忠（38回）
岩村　康生（41回）

〔書面等による意見参加〕

岡村　甫（32回）
谷　敦雄（34回）
角田　進（42回）

現役合格率下がる　今春の大学進学率は指導部の調べで、56・6％と昨年の63・3％を下まわった。東大合格者は、4名（内現役2名）、学芸は18名（内現役9名）だった。

（参考）　**主要大学合格者の比較**

		土佐（現役）	学芸（現役）
東大	本年	4（2）	18（9）
	昨年	7（5）	3（2）
京大	本年	5（4）	7（3）
	昨年	3（2）	4（4）
阪大	本年	10（7）	7（5）
	昨年	7（6）	3（2）
東北大	本年	2（1）	4（2）
	昨年	6（2）	0（0）
名古屋大	本年	1（0）	8（2）
	昨年	0（0）	0（0）
九州大	本年	3（2）	6（2）
	昨年	4（2）	0（0）
北大	本年	2（0）	1（0）
	昨年	1（1）	2（1）
小計	本年	27（16）	51（23）
	昨年	28（18）	12（9）
神戸大	本年	10（7）	4（2）
	昨年	7（3）	4（2）
一橋大	本年	2（1）	0（0）
	昨年	3（2）	0（0）
東工大	本年	2（0）	0（0）
	昨年	2（2）	1（1）
高知医大	本年	18（3）	4（1）
	昨年	14（6）	7（3）
高知大	本年	23（17）	41（28）
	昨年	31（27）	56（43）
慶大	本年	8（4）	5（2）
	昨年	18（12）	3（2）
早大	本年	33（17）	15（7）
	昨年	44（19）	11（6）
上智大	本年	5（3）	0（0）
	昨年	8（4）	11（5）

北岡さん（5回）の喜寿祝う

筆山会　記念ゴルフ大会開く

今年77才の喜寿をむかえられた北岡龍海氏（5回・前支部長・筆山会々長）をお祝いする筆山会の第16回ゴルフ大会が、六月八日、神奈川県レインボーCCで行われ、大会史上最多の三十七名が参加した。

当日は参加者全員と、コンペに参加しなかった島野広氏（1回）他有志合わせて七十名から記念品が贈られた。また北岡氏からは北岡杯が寄贈された。

大会は松本祐一氏（31回）が優勝。取り切り戦の「北岡杯」は山本高敬氏（25回）が獲得した。

筆山会ゴルフの第1回大会は昭和四十八年四月十五日に十六名が参加して熊谷ゴルフコースで開かれたが、その後九年間のブランクの後、五十七年に、25回生の畠中朗氏他の尽力により再開。春夏年二回開催され年々参加者が増えている。第1回の参加者で今回の記念大会に出場されたのは次の五氏である。（敬称略）

北岡龍海5回　中尾成彦9回
吉澤信一16回　宮地貫一21回
久保内貞行20回

10位までの成績次の通り。

	G	H	N
①松本祐一31回	91	18	73
②山本高敬25回	96	22	74
③小松建紀33回	86	12	74
④竹内章敏37回	92	18	74
⑤中村明裕35回	97	22	75
⑥溝渕真清32回	98	22	76
⑦尾神俊彦33回	84	BG 8	76
⑧千原　望33回	96	18	78
⑨浅井伴泰30回	94	15	79
⑩宮地貫一21回	102	22	80

〔その他の参加者〕

北岡龍海5回　中尾成彦9回
寺川博典12回　吉澤信一16回
久保内貞行20回　前田速雄22回
山中和正24回　上田雄司25回
野沢真次25回　山村泰造26回
植田剛生30回　大町　玄30回
鍋島高明30回　阿部辰雄30回
三宮祥弘30回　秦　道夫33回
澤村良節33回　宮川洋治33回
藤原健男33回　池添久茂33回
浅井和子35回　植田　豊35回
橋田正幸37回　弘瀬孝昭37回
中島　宏38回　窪田秀忠38回
小松三男41回

なお次回は10月28日（土）千葉県上総GCで開催予定。（常任幹事＝宮川洋治33回・電話　03－582－7891（会社））

三根校長墓参の会

筆山会恒例の三根校長墓参の会は、七月十五日（土）午後行われた。多摩墓地に眠る初代校長、三根先生の墓参りのあと、近くの岡村前会長のお墓にも訪れ、マイクロバスで深大寺の水神苑に向い、懇親会。酒をくみかわして古き良き時代をしのんだ。

♬♪♬ 平井康三郎氏一家の演奏会、高知で開く ♬♪♬

五回生の音楽家平井康三郎さんと長男のチェリスト丈一郎さん、二男のピアニスト丈二郎さんの音楽一家せいぞろいの特別演奏会が五月六日、高知市の県民文化ホールで開かれた。

高知市制百周年を記念して開かれたもので、音楽の各分野で活躍中の三氏がそろって〝里帰り演奏〟するのは初めてとあって、千人の市民や音楽愛好家が聞きほれた。

みんな元気でやりゆうかえ…
たまには寄っていきや

暮らしいきいき、ビビッドバンク

高知銀行

東京支店　中央区八重洲2-6-21（電）03-273-3061

’89新年総会に出席して

54回生
高崎真一

薄情者との謗りは免れまいが、初めて同窓会に参加させていただいた。何人かの懐かしい顔にも会えたし、竹邑類先輩の講演や劇団の方々の公演は楽しいひとときであった。ただ、同期の参加者がもっと大勢であったならもっと楽しかったではあろうが。

今母校を振り返って思い出されるのは、成人雑誌を回し読みした修学旅行のこと、模擬店を出した文化祭のこと、仮装行列や櫓が楽しかった体育祭のことである。こういう行事こそ大事にしていって欲しいものである。事情はあろうが、修学旅行を中三に移すとか文化祭が隔年になったとか報告する校長先生の姿が淋しく映ったのは、私だけだったろうか。

61回生
筒井美智

去る一月二十一日に、東條会館で行われた土佐中・高校同窓会は、私にとって非常に有意義なものでした。私自身は三年前に高校を卒業以来、同窓会は初めてだったのですが、当日受付の仕事をお伝いさせていただいたこともあって、たくさんの先輩方と知りあう機会に恵まれました。

そして、何よりも私が嬉しく、また心強く感じたことは、そういった先輩方が、社会において、非常に幅広い分野でご活躍なさっていることがわかったことでした。

ただ一つ残念だったのは、若い人達の参加が少なかったこと。できれば来年は、同世代の人に、もう少し出席してもらいたいなと思いました。

INTERVIEW ⑦

第7回朝日現代クラフト展で奨励賞を受賞した 山本美香さん

1965年生まれ
土佐高59回生

「遊び心の多様な表現」——これが今回のクラフト展のテーマ。となるとこの遊び心はどの辺から培われるのか気になるところ。

「乗馬をやるんです」にはまずびっくり。「お酒もふつうには飲みます」と笑うと、パッと花が咲いたように周りが華やぐ。

受賞作品の題名「NATURAL WEAVING」。とでも訳すのか。「素材の面白さが評価を受けたのだと思います」という天然の素材は高知に求めた。

山で採ったゼンマイの綿、栽培した芭蕉、綿花、和紙、麻。これらの繊維を手で紡ぎ、織り上げたタピストリー。わかりやすく言えば、タタミ一畳ほどの大きな染織の壁掛けが三枚並んでいる。従来、独立した民芸染織として発展してきたこれらの素材をみごとに融合させた三連作である。

天然織「もう少し鮮やかな色合いにしたらとも言われますが、素材の持ち味を生かしたいし、第一自分らしさを失いたくありませんから」と素材にはこだわる「いごっそう」の面も。

「高知は好きですが、みように卑屈だったり、視野の狭さは気になります」と郷里への批判の目も確か。

その高知は香美郡香我美町山南の蔵の中で、ひばあちゃんが使ったという織機の部品を見つけたのが十七歳の頃。「ああ、私にはこんな血が流れていたのか」と感じて染織の道へ。

東京造形大学を昨年卒業後、日本橋の着物関係の会社に就職した。「お茶くみから在庫管理、何でも」やるOL生活の寸暇を惜しんで機を織る。

結婚は目下念頭にないがこればかりは高知にこだわらず「外国人でも」

家族は高知市に高校の先生をしている両親と、東京の大学在学中の弟の四人。

「弟は毎年誕生日に花を持ってきてくれます」というやさしさ。

「魚の骨はいつもとってもらって食べ、お姫様みたいに育ちました」

そして綿花を栽培してくれた祖母。素材としての彼女も、こうした暖かさの融合の中から生まれたに違いない。

（岩）

今、こんなことをしています——⑥

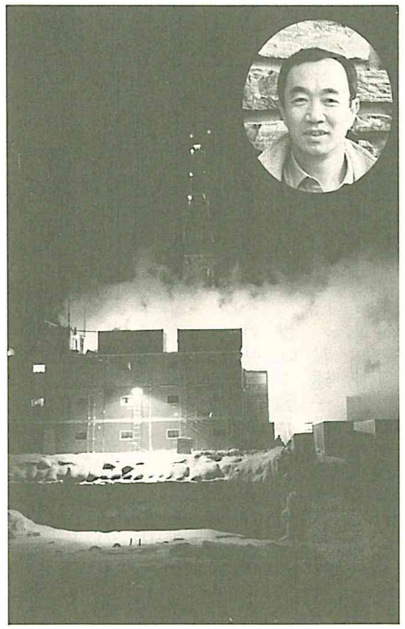
北極にかける夢

オーロラの下石油を探す

37回／海外石油開発㈱ 弘瀬孝昭

土佐弁で言えば、「北極へ何しに行くがぜよ。犬ゾリで行くがかよ。エスキモーはこじゃんとサービスしてくれるにかあらんぜよ」等々無責任な友人・知人からひやかしともつかぬことを言われて、北極海の西端に位置するカナダ領ボーフォート海の石油探鉱現場を訪れたのは数年前の二月上旬のことである。

白夜の夏には瀬戸内海を思わせるようなこの海域も、冬ともなると太陽の昇らない暗黒の世界に一転する。気温はマイナス40°ないし50°に下がり海面を覆いつくす氷山と吹き荒れるブリザードとで、さながら童話のなかの白熊の里を呈するようになる。このような極限の地に数百億バーレルの石油が眠っていると言われている。



この石油を求めて七〇年代以降、世界の大手石油会社が活発な探鉱活動を続けており、日本からも某社が八一年よりこのゲームに参加している。

同海域での冬期の探鉱作業は、夏期の解氷期に設置された約百米四方の人工島から行なわれる。当然ではあるが、氷や寒さに対する充分な準備が必要で、このため島での対策はもとより、陸上前線基地のサポート部隊の援助が重要な役割を担っている。島の上には掘削櫓、事務所兼宿舎、島を圧迫する氷の圧力や性状を調べる計測小屋などが整然と配置されている。面白いのは島の周囲の氷山をローラーで平にし、そこを資材置場や暴噴の際の避難場所としていることである。このような作業を実施するには、従来の石油探鉱技術のみならず、建設・鉄鋼・造船などの技術の粋を集めたノウハウが必要で、各石油会社とも世界中からその道のエキスパートを集めて事にあたっている。この結果一坑を掘削するのに約一億ドルをも要する巨大プロジェクトとなっている。

小生が訪れた現場にも種々の技術者が色々の国から集まって来ており、中には女性も多く見うけられた。極北の地でいさましい男どもに混って女性がたくましく(?)働いているのに出合ったのには正直なところ驚いた。彼・彼女等は、島の近辺に出没する白熊を友とし、大空に激しく音をたてて現れる極彩色のオーロラを楽しみつつ、石油の噴出に夢を賭けて頑張っているとのことであった。

この夢の達成には、なおしばらくの時間と多額の資金を要すると思われるが、このプロジェクトに取り組む人々の情熱からしても、必ずオーロラの下のこの海域が将来石油の宝庫となることを小生は信じて疑わない。

待望の300万円からの定期。
スーパーMMC 新発売!!
1,000万円からの定期。
MMC
2,000万円からの定期。
大口定期
高利回りのうれしさが、3コース。
まとめて、メインバンク。
ゆたかなくらしのパートナー…
四国銀行

特別手記

昭和天皇の病理検査を担当した故浦野教授夫人が綴る

昭和の終った日

浦野純子（30回）
船橋病院小児科医師

昭和六十四年一月七日、昭和の終った日、私は主人（浦野順文東大教授）の一周忌の法要を翌日に控え準備に忙しかった。

この朝二人の息子を大学に送り出した後、テレビで天皇陛下の危篤のニュースを知ったが、私には陛下崩御の時の病名発表が主人の診断名と一致するか気掛りであった。その後宮内庁の藤森長官より「十二指腸乳頭周囲腫瘍（腺癌）」と発表された。「いつか真実が公表されるべきだ」と願っていた故人の意志が通じたと安堵し宮内庁の発表に感謝した。

六十二年九月、天皇陛下の病理検査の依頼があった頃、主人自身も肝臓癌に冒かされ闘病中であったが、残りの限られた時を惜しむように教育と研究生活に没頭していた忙しい日々であった。しかし陛下の病理検査を担当すると知られてからは報道関係者が教授室、自宅にも詰めかけ休む暇もなかった。律義な主人は嫌な顔もせず丁寧に応対し、

「病名の告知というのは臨床医が患者にするもので、病理学者の役目ではありません。私たちは主治医だけに検査結果を報告しますが外部にはいっさい公表しません」と話していた。また自宅にも報道陣が訪れ休養もとれないことから数日間都内のホテルに避難することにしたが、この際自宅のドアに「標本は美しく意地悪ではなかった。顕微鏡をのぞく者にも大御心をくださったのだ」と云う意味のフランス語のメッセージを張り出した。この「美しく」と云う表現が癌でないことを婉曲に云っているのではないかとか様々な憶測を呼んだが、本人は「顕微鏡で見ると細胞というのはきれいだし、意地悪でないと云うのは診断が難しくなかったと云う意味だ」と話していた。

宮内庁の公式発表のあと、主人は体調を崩し「陛下より自分が先に死ぬかも知れない」「本当のことを云い残しておきたい」という思いが強くなったように思えた。

六十三年一月六日、もう黄疸は著明であったし、腹水でズボンも入らない状態であったがNHKの放送センターへ出かけて行った。「日本では一般的に癌ということを患者に告げない方が多いので診断を偽って膵炎と云ったことは日本の国民の方々もご理解いただけると思います。しかし日本人の知的水準からみても真実をいつまでも隠しておくことは出来ないと考えました。そして何よりも天皇陛下御自身も科学者であられ、やはり真実を尊ばれると思います…」約20分間病理検査の結果と、思っている事の全てを話した主人は一つの仕事を成し遂げた時の穏やかな顔であった。

それから一週間後の一月十三日、逝ってしまう二日前、主人は新学期最初の「病理学総論」の講義に出かけた。この日最後の力をふり絞る様にもう何も食べられない体に陛下の病理検査の時頂いた恩賜の銀杯で氷水を飲み出かけて行った。「人間は病気と回復をくり返しながら完全治癒なく死に至るのです」と云う自らの死を悟ったような言葉でしめくくった。病院に帰った主人は「これで仕事が一段落した」と満足そうにベットに入り36時間後には彼岸の人となった。

真実は一つ

昭和一ケタ生れの主人には陛下のお役に立ったことは非常に嬉しく同時に誇りに思っていたようだった。しかしビデオテープを残したことは真実は一つしかないとする学者としての良心であり願いであったと思う。

奇しくも主人の一周忌法要の前日に流れた〝真実を語る〟主人のテレビの前で、私は慶大と千葉大で医学を学んでいる二人の息子が、父の示した学者としての生き方を受け継いでくれることを願った。

思い出の先生方⑤

悲しきゼロの計算

吉本　要先生（昭和60年ご逝去）

高橋展子（ご長女）

娘の私も六十半ばのおばあさんで父の事は昔々の思い出話しになりますが、私の心に残っている父はずっと学校に通っている人のようでした。

二十七才で父親を亡くし四人妹弟の長兄として家の柱として過した事、学生の頃は日章の飛行場の近くの家から市内の師範学校まで毎日歩いて通い一週間で新しい下駄が板のようになった苦労話しなど聞いた事がありますが、長い間無遅刻無欠席で学校に通うことが出来たのもこの頃に培かわれたものかと思います。

晩年はバイクで後免まで通っていましたが冬期など真暗の中、家を出ますので近所の人は「先生のバイクの音が目覚しだった」と云っていました。

皆様のおばあ様、お母様方からはカマスと呼ばれ、又若い方々からは生きた化石と呼ばれていたようです。私が第一高女入学の時、先生からお父さんの名前はときかれ、私がカナメと云ったつもりがどうしたことかカマスといったと大笑いされた思い出があります。残念ながらカマスの由来は分りませんがご想像におまかせ致します。

父は頭の毛がちゞれていて早くから坊主刈りにしていたようです。私の家に上京して来る時もバリカン持参で一週間に一度は自分で器用に合せ鏡で床屋をしていました。

第一高女の教え子の子供さんや孫の方々が土佐中には多く、例の愛用のムチを持って

「おまえのお母さんはよく勉強して成績が良かった」と嫌味を云ったようです。

私達子供はあまり叱られた事はありませんでしたが、悪い成績を取って来ると、父が机で仕事をしているそばに坐らされ瞑想をさせられた事を思い出しましたが家に帰っても教師だったのでしょうか。

上京して来ると今度はどこそこへ行ってみようと、地図をたよりに東京中一人でよく出歩きましたが、たまに親孝行のつもりでお供しますと、所かまわず交番に入り、おまわりさんをつかまえて、あそこがここがと、しつこく自分でなっとくいくまで聞き、今日駄目ならまた次の日に行き、若いおまわりさんにこのおじいさんはどうした人なのかと嫌な顔をされ、お供の私も何度か閉口しました。

父は無口でしたがお酒が入ると朗らかになり、若い時から一升飲んでも二升飲んでもくずれる事はなかったようです。何事もよく計算して実行する人でしたが、亡くなる一ケ月前に上京して来て、

「わしも二、三日でどうこういうわけでもないが後十年も生きたら百才になるが、あんまり人に世話はかけたくない」とポッツリ云い二週間前には神戸から日章へ帰って「もうこれが最後かもしれません」と近所に一軒々々挨拶して廻り二週間後の七月三十日の夜寝（ヤス）んだまゝで昇天してしまった父の最後の0（ゼロ）の計算に娘の私は悲しい思いをしましたが、父は自分なりに満足して逝ったのかもしれません。

妻と二人の息子に先立たれ、父は淋しい人でしたが、学校をこよなく愛し、教え子の翔きをこの上ない喜こびとしていました。皆様のお陰様で叙勲をされ、今またこうして教え子の方々が父を偲んで下さるなんて大変な幸せ者なんですネ。

私も久しぶりに父の思い出に浸る事が出来ました。

皆様方のご健康とご多幸をお祈り致しながら心より御礼を申し上げます。

カット＝田内瑞穂著
「甚田先生はだか日記」より